

氏 名	近澤 幸 (ちかざわ さち)
学 位 の 種 類	博士(看護学)
学位授与番号	甲博看第4号
学位授与年月日	令和4年3月2日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題名	母親と家族が乳児に対して行う沐浴と入浴時の危険を防ぐための教材の開発と適切性の検討 (Teaching Materials for Mothers and Families to Prevent the Dangers of Bathing Infants: Development and Review of Suitability)
論文審査委員	(主) 教授 竹村 淳子 教授 佐々木 綾子 准教授 瓜崎 貴雄

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

《緒言》

子育てには、授乳、寝かしつけ、おむつ交換、沐浴などがある。沐浴や入浴には、乳児の清潔保持、全身の観察、新陳代謝の向上、生活リズムの定着、親子のスキンシップなどの目的がある。そして、更衣、洗浄、身体の把持、保湿など様々な動作が含まれる。実施する場所には広さの制限があり、多くが単独行動で、手際の良さも求められる。そのため、沐浴や入浴は母親と家族が十分な知識や練習なく安全、安楽に実施するには、難度の高い行為の一つである。また、わが国の現状では、単独で子どもの沐浴や入浴をせざるを得ない状況や、複数の子どもの世話を同時に行う状況、不慣れな技術、疲労による体力や判断力の低下など、危険につながる多くの要因がある。

現在、妊娠中の母親教室や両親教室、母親の産褥入院中、退院後の家庭訪問で沐浴や入浴の指導が行われている。一般的な手技を中心に指導が行われ、家庭で実施する母親と家族が体験しやすい危険を考慮した指導とは限らない。地域社会や育児の状況などは変化しているが、沐浴や入浴についての指導は、十分検討されていない。さらに、母親と家族が体験している危険は不明瞭であり、指導に活かされていない。現在のわが国では、このような指導の不十分さによる危険が発生していると推察されるにも関わらず、対策が講じられていないという問題があると考えられる。

そこで、母親と家族が乳児に対して行う沐浴と入浴時の危険を予防するため、母親と家族の危険な体験を踏まえた教材を開発し、適切性を検討した。

《目的》

第一段階の文献研究では、乳児の入浴に関連した危険の実態について既存の研究を整理することを目的とした。

第二段階の実態調査では、3～4か月の児および1歳6か月の児をもつ母親と家族が体験した乳児の沐浴や入浴の危険に関する日本における実態を明らかにすることを目的とした。

第三段階の教材の適切性の検討では、母親と家族が乳児に対して行う沐浴と入浴時の危険を予防するため、母親と家族の危険な体験を踏まえた教材を開発し、適切性を検討することを目的とした。

《方法》

第一段階の文献研究では、医学中央雑誌 Web 版, PubMed, CINAHL を用い、2000 年から 2019 年に発表された文献を検索した。該当した文献のうち、目的に合致した 18 件を分析対象とした。

第二段階の実態調査では、3～4か月健康診査および1歳6か月健康診査で、無記名自記式質問紙を配布し、郵送法での回収を行った。有効回答が得られた3～4か月の児をもつ母親と家族170人および1歳6か月の児をもつ母親と家族304人を対象に、調査項目ごとに記述統計を行った。体験した危険について推測統計による初産・経産および指導の有無の比較を行った。

第三段階の教材の適切性の検討では、文献研究および実態調査の結果から要素を抽出し、沐浴や入浴の手順の中に、危険な場面と予防、工夫点などを組み込んだ、動画と音声、文字を用いたデジタルコンテンツの教材を作成した。対象者に教材と無記名自記式質問紙を配布し、教材の視聴と質問紙の記入を依頼した。対象者は、アドバンス助産師と助産師会に属する助産師、保健師、計20人とした。回収は郵送法で行った。

《結果・考察》

第一段階の文献研究の結果、研究動向として、乳児の沐浴や入浴に関連した危険に関しては、2000～2019年の20年間、継続して研究が行われており、徐々に増加していた。また、児の生命や健康に影響をおよぼした症例の報告が中心に研究されていた。そして、発生内容には、溺死や転落、熱傷などがあり、児の生命や健康を脅かすようなできごとが発生していた。発生件数は、1歳未満の浴槽での溺水は他の年代と比べて多く、死亡に至るできごとが発生していた。要因として、乳児から家族が目を見失っている場面が多く報告された。そのほかの要因として、首浮き輪や入浴用椅子など入浴用品の不適切な使用、家族の認識不足、環境に関連するものがあった。

第二段階の実態調査の結果、3～4か月の児をもつ母親と家族では、沐浴では60.0%、入浴では64.9%が危険を体験したことがあった。体験した危険の内容は、沐浴では、「湯の中に落としそうになった」「顔が湯につかりかけた」「せっけんの泡が口に入りかけた」、入浴では、「せっけんの泡が口に入りかけた」「顔が湯につかりかけた」「床に落としそうになった」の順で多かった。また、起こりうる危険の内容や予防について指導を受けていなかった母親と家族は、沐浴では55.9%、入浴では81.8%であった。1歳6か月の児をもつ母親と家族では、母親と家族の

71.1%が危険を体験したことがあった。体験した危険の内容は、「顔が湯につかりかけた」「顔が湯につかった」「湯の中に落ちた」の順が多かった。母親と家族の70.7%が危険の内容や予防について指導を受けていなかった。

第三段階の教材の適切性の検討の結果、目的適合性、内容の難易度、映像の見やすさ、時間の妥当性、表現の適切性、活用可能性から、教材は、おおむね適切であった。現在用いられている沐浴の教材は、危険に着目したものではなく、入浴については、これまでに教材として使用されているものがない。作成した教材は、何度も視聴することができ、沐浴や入浴に不慣れな母親と家族が危険や危険予防について知識を得ることができる。具体的な予防策や危険が発生した際の対処法を加えること、実践との併用によって、さらに、危険の減少や不安の軽減のために、適切な教材となると考える。

《結論》

研究を通して、乳児の沐浴や入浴の危険に関する研究動向や内容と要因、体験した危険の内容や状況、行った工夫の実態を明らかにすることができたと考える。そして、現在不足していると考える危険に焦点を当てた指導について検討することができた。

論文審査結果の要旨

申請者は、乳児の沐浴・入浴の際に生じる危険に着目し、沐浴・入浴時の危険に関する実態調査を行い、調査結果をもとに教材の作成を行った。

第1研究では、乳児の沐浴・入浴に関連した危険の実態について、国内外の文献を用いて明らかにした。その結果、事故の内容は、溺死や転落、熱傷などであり、乳児から家族が目を離している場面が多ことや、首浮き輪や入浴用椅子など入浴用品の不適切な使用、家族の認識不足等が要因であったことを見出していた。

第2研究では、事故に至らないまでの沐浴・入浴時に体験した危険について、3～4か月の児および1歳6か月の児をもつ母親と家族を対象とした実態調査を行った。研究方法は、先行研究を参考にした質問紙を用い、調査項目ごとに記述統計にて分析された。有効回答数は3～4か月の児をもつ母親と家族170人、1歳6か月の児をもつ母親と家族304人であった。分析方法は、体験した危険について推測統計にて初産・経産および指導の有無の比較を行った。その結果、危険を体験していたのは3～4か月の児をもつ母親と家族では、沐浴で60.0%、入浴で64.9%、1歳6か月の児をもつ母親と家族では、71.1%であった。危険の内容は「湯の中に落とそうになった」「顔が湯につかりかけた」等であった。危険に対する指導を受けなかった母親と家族は、3～4か月の児の母親と家族では沐浴で55.9%、入浴で81.8%、1歳6か月の児の母親と家族では70.7%であった。有意差がみられた項目は「慣れていなかった」「他の子どもの世話をしていた」で初産・経産の違いがあった。

第3研究では、上記2つの研究結果から、沐浴・入浴の手順に危険予防と工夫を組み込んだ音声付動画を教材として作成し、助産師、保健師に動画を視聴した上で、教材の適切性を問う質問紙調査を行った。その結果、概ね高評価であったが危険予防の具体策と対処法に関する改良点が明らかとなった。

この研究の独創性は、事故に至る前段階の危険を予防しようとする点であり、審査においては、研究方法の選択、活用方法についての質疑が行われ、明解な回答が得られた。

以上により、本論文は本学大学院学則第13条第3項に定めるところの博士(看護学)の学位を授与するに値するものと認める。

(主論文公表誌)

A Survey of Dangers Experienced by Mothers and Families of Infants Aged 3-4 Months during Ablution and Bathing, Health, 13(11), 1242-1269, 2021.

A Survey of Bath Time Incidents Experienced by Mothers and Families of Children Aged 18 Months, Health, 13(10), 1071-1090, 2021.